

典礼奉仕としての聖書朗読

1 はじめに

聖書朗読は教会における典礼奉仕の中で入門編という扱いになることが多く、願う側もされる側も気軽に行うことが多い印象があります。しかし、その結果として、

- 読み間違いが多い。
- 不明瞭^{めいりょう}で何を言っているか分からない。
- 早口で聞き取れない。
- 妙に感情が込もって芝居^{しばい}がかっている。

……といった朗読に首をかしげることも少なくありません。布池教会においても、時々このような朗読を耳にすることがあります。そこで、典礼朗読における参考になれば……ということで、このような文書を作成しました。どうか聖書朗読の前、お暇^{ひま}なときでかまいませんので、目を通していただけると幸いです。

なお、ご注意いただきたいのですが、この文書はカトリックの典礼における聖書朗読の霊^{れいてき}的な意義^{いぎ}等に関して解説……とい

うようなものではありません¹⁾。あくまで、典礼奉仕における聖書朗読に関してその注意点と理由を述べるためのものです。

2 聖書朗読を行うようになった理由

なぜミサで聖書朗読が行われるようになったのでしょうか。なぜ典礼の場において、会衆の前で聖書が音読されるようになったのでしょうか。たとえばパウロ書簡をみると、

この手紙をすべての兄弟たちに読んで聞かせるように、わたしは主によって強く命じます。——1テサロニケ 5:27

パウロ自身が会衆の前で音読するよう指示しています。

この手紙があなたがたのところで読まれたら、ラオディキアの教会でも読まれるように、取り計らってください。また、ラオディキアから回って来る手紙を、あなたがたも読んでください。——コロサイ 4:16

これも同様に指示しているようです。なぜ「会衆の前で」「音読」なのでしょう²⁾。

聖書の時代、文字を読めた人は人口全体の中で極めて少数でした。古代の識字能力に関する研究によると、紀元前5世紀のアテネ³⁾においてですら、識字率は高目に見積っても十数パーセント程度といわれています。西暦1~2世紀のローマ帝国に

1) そのような解説を含め、機会があればこちらの方も御参照下さい。

『朗読聖書の緒言^{しよげん}』:日本カトリック典礼委員会編,カトリック中央協議会(1998)

ISBN978-4-87750-088-7

2) 以下の話に関しては、『捏造された聖書』:バート・D・アーマン(2006) 柏書房 ISBN-13: 978-4760129423 の記述を下敷としております。興味のおありの方は御一読を。

3) この時代の世界において最も高い文化水準にあった場所です。

において、識字率はそれよりはるかに低いものであったと考えられます。

しかも、(特に初期の)キリスト教において、その信徒の大多数は何ら教育を受けていない人々でした。使徒においてですら、

議員や他の者たちは、ペトロとヨハネの大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であるということも分かった。

——使徒言行録 4:13

この「無学」という言葉は明らかに「文盲^{もんもう}」を意味しています。そして、ここには同時に「普通の人」とも書かれています。ガリラヤ湖の漁師であったペトロやヨハネが識字教育を受けていないのは当然なのですが、それがごく普通である……そういう時代だったことをこの記述は示しています。キリスト教の共同体においても、大多数が文字の読み書きのできない人達で構成されていたことは想像に難くありません。

しかし、キリスト教は(文字で記された)聖書^よを拠り所とし、権威^{けんい}あるものとしています。その成立時期においても、旧約聖書は言うに及ばず、新約聖書を構成することになる福音書、言行録、書簡、黙示録、それに加えて、現在の聖書に収録されていない様々な文書、書簡等……そういったものが、文字で記され、流布^{るふ}され、共同体で共有されていたわけです。

繰り返しますが、当時のキリスト教の共同体は「大多数が文字の読み書きができない人達」だったのですね。しかし、その信仰^よの拠り所は文字で記され、流布され、共同体で共有されていた……では、文字の読めない人達はどうやって文字で書かれたものを享受していたのでしょうか。

これこそが、当時の共同体で「会衆の前で」「音読」が行われた理由です。当時の共同体にごくわずか存在していた文字を読める人達が、大多数の文字の読めない人々のために朗読奉仕を行い、共同体では会衆がそれを聞くことで聖書や書簡の内容を共有していたのです。

このような光景は旧約聖書でもあちこちで見ることができます⁴⁾が、ここでは新約聖書におけるそのような記述を引用しておきます。

イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。——ルカ 4:16⁵⁾

モーセの律法は、昔からどの町にも告げ知らせる人がいて、安息日ごとに会堂で読まれているからです。」——使徒言行録 15:21

わたしが行くときまで、聖書の朗読と勧めと教えに専念しなさい。——1 テモテ 4:13

この預言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。時が迫っているからである。——黙示録 1:3

つまり、典礼における聖書朗読は、二千年の昔から私達が信仰と共に受け継いだ、共同体が信仰をつなぎ、わかちあう為の重要な行為なのです。

3 今もなお聖書朗読を行う理由

4) 会堂の会衆に聖書や書簡を読み聞かせる光景や、王やモーセのような指導者が民に読み聞かせる光景が数多く記述されています。

5) ここは特別。イエスさま御自身が会堂で聖書を朗読する場面です。

では、この 21 世紀に聖書朗読を行う意義は何なのでしょう。これは明文化されていて、たとえば『ローマ・ミサ典礼書の総則』第 2 章 9 には以下のような記述があります。

聖書が教会で朗読されるときには、神ご自身がその民に語られ、キリストは、ご自身のことばのうちに現存して福音を告げられる。

この記述は、「ことばの典礼」における朗読（や答唱詩編、詠唱）がただテキストを読む行為でなく、それを通して会衆に神のことば、キリストのことばがもたらされる、非常に大事なプロセスであることを示しています。

教皇フランシスコは、2018 年 1 月 31 日の一般謁見^{えっけん}における「神とその民の対話である、ことばの典礼」をテーマに行われた講話^{こうわ}の中でこの記述を引用されています。その際に、

聖書が朗読される時、聖書のページは書かれたものから、神によって話される生きた言葉となり、神はわたしたちにそれを聞くようにと呼びかけられる⁶⁾

と言及^{げんきめう}されています。このことこそが、今もなお聖書朗読を行う最大の理由です。21 世紀にあってもなお聖書朗読はきわめて重要な典礼奉仕なのです。

4 実践編:注意すべきこと

では、実際に朗読を行う上での話に入っていきます。ここまでの話で書いてきたことは、

1. 聖書朗読は、ことばを直接会衆に伝える重要な典礼奉仕で

6) 『典礼の中で神ご自身が語る言葉に耳を傾ける、教皇一般謁見』:バチカン放送局 (31/01/2018) より引用

ある。

2. その重要性は、文字を読めない人が大半だった原始の教会ではもちろん、現在の教会においても変わらない。
3. 朗読は、朗読者の口から言葉が発せられていても、それは朗読者の言葉ではなく、神のことばであり、キリストのことばである。

ということです。まずはこれを念頭に置きましょう。そうすれば、^{おの}自ずと注意すべきこと、しなければならぬことは見えてくると思うのです。

4.1 奉仕であることを意識する

典礼奉仕^{たずさ}に携わるということは、会衆の中で人前に入る、人目に触れるということになります。そこで何らかの優越感や特権意識を感じる人というのが、残念ながら存在するようです。また、長く奉仕に携わっている人でも時々おられるのですが「してやっている」という意識を持ってしまう場合もあつたりします。

しかし、奉仕というのはそういうものではありません。たまたまこれを書いている今日、教皇フランシスコが Twitter でこんなことをつぶやかれました:

洗礼者聖ヨハネのように、キリスト者は謙遜^{けんそん}にならねばなりません。そうすれば自らの心のうちに主が育つのです⁷⁾つまりはそういうことですよね。この謙遜^{けんそん}は、ただ目前^{もくぜん}の会衆に向けたものではありません。何よりもまず主に向いたものであり、そして自分に向いたものでもあるはずなのです。奉仕は無償の行為であっても、この意味において幾許^{いくばく}かの責任が生じ

7) https://twitter.com/chuokyo_pope/status/10111034462811901952

るものです。まずはその責任を自分の負える範囲で負い、果たすことを意識しましょう。

4.2 練習しましょう

読むにあたっては……まず、練習しましょう。できれば一、二度は、実際に声を出して読むべきです。大声を出す必要はないのですから、会衆席で声を出さずに口だけ動かして練習するのも良いでしょう。

音読することは重要です。古代、「読む」という行為はイコール音読を意味していました⁸⁾。音読は誤魔化しがききません。本番で引かかる箇所は、練習で音読すれば必ず引かかりますから、本番でそうならないように対策（そこを何度も読み返したりルビをふったり）ができるのです。

どうしても音読が難しい場合や事前の時間がない場合も、何度か黙読して構成と内容を把握しておきましょう。

また、自分が朗読に当たっていないときも、ミサ前に『聖書と典礼』に目を通し、自分が読むことを連想しながら音読するように読んでみると良いでしょう。

4.3 音読のポイント

4.3.1 声が出るようにする

朗読ですから、声が出なければ読めません。事前の音読は発声練習の効能もあります。また朗読台の前に立つと緊張するでしょうから、身体に無駄な力が入らないようリラックスして、

8) たとえばアウグスティヌスは『告白』の中で、彼を信仰へと導いたアンブロジウスに黙読の習慣があることを驚きをもって記しています。いかに音読が一般的であったかがうかがえる記述です。

姿勢を整え、一呼吸してから読み始めましょう。

4.3.2 読む速さ

人は、ある程度慣れた内容を音読する際に早口になる傾向があります。分かっているのでさっさと話そうとしてしまうわけですが、聖書朗読はあくまで会衆に向けたものです。会衆にみことばを伝えることこそが目的なのです。ですから、会衆のペースに合わせて読む必要があるわけです。

「皆さん『聖書と典礼』を見ながら聞いているんだから……」

いいえ、それは違います。聖書朗読の内容はことばでもたらされるのです。ですから『聖書と典礼』を見ていない人がことばで内容が受け取れるように読まなければなりません⁹⁾。「ちょっと遅いかな」位で丁度良いのです。言葉の端々までおろそかにせず、会衆に送り届ける気持ちで、自分の口から出た言葉のひとつひとつが、会衆の耳に入っていく様子を思いつつ読みましょう。

そして大事なのは、読みながら、聖堂に反響して返ってくる自分の発した声、自分の発したことばに耳を向けておくことです。聖書朗読は聖堂内の全ての人に向けたものですが、中にはあなた自身も入っています。聖堂に響くあなたのことばは、もはやあなたのことばではありません。神のことば、キリストのことばです。会衆の一人として、あなた自身もそれを受け止めつつ読みましょう。そうすれば、ぞんざいに速く読むことは自ずと出来なくなるはずなのです。

9) そして会衆も『聖書と典礼』を見ずに朗読を聞くべきなのです。

4.3.3 発音

「言葉の端々までおろそかにせず」と先に書きましたが、これは発音においても同様です。特に不明瞭になりやすいのは文末と子音でしょうか。拙速にぞんざいにならないよう、意識して読みましょう。また、発音の似通った言葉（たとえば「神」と「民」のような）も混同しないよう注意すべきでしょう。

4.4 自分の言葉ではない

これも勘違いが生じやすいポイントのひとつなのですが、何度も書いているように、「ことばの典礼」における朗読は朗読者のことばではありません。聖書に記されている神のことば、キリストのことばそのものである、と考えられているわけです。

ですから、

- 書いてあるままに読む。
- 書いていないことは読まない。
- 朗読者の感情を込めない。

ことが求められます。

4.4.1 書いてあるままに読む

これは「正確に読む」ということです。私達は人間ですから、全くミスをせずに読める保証はありませんが、ミスのないように努めるべきではあるでしょう。事前の練習、チェックを行いましょう。

4.4.2 書いていないことは読まない

これは以前に実際にあった話です。ある信徒が朗読をされることになったのですが、このときの朗読箇所には「イエスは……」という文言が複数回出ていました。そして「ことばの典礼」が始まると、この方は、「イエスは……」という文言を全て「イエスさまは……」に置き換えて朗読を行ったのです。

この方の心情が分からないわけではありません。自分の口から「イエスは」「イエスは」と出てくるのは不遜ふそんだと感じたのでしょうか。しかしこの方は、大事なことを分かっていたいかなかったのです。自分の口から出てくるものが自分のことばではない、ということ。神のことば、キリストのことばを、この方は自分のことばにしてしまったのです。

改竄かいざんというには大袈裟おおげさかもしれませんが、これは朗読者としてはすべきでないことです。そしてこのように、この手の行為は時に（浅い認識のもと）善意の結果として行われるものです。ですから私達は、典礼における聖書朗読の意味をしっかりと頭に入れておく必要があるのです。

4.4.3 朗読者の感情を込めない

たとえば、パウロが書簡で何らかの勸告かんこくを行うくだりを朗読するとしましょう。こういうときに「分かっていない」朗読者は、自らがパウロになり代わり、怒りの感情を声に込め、権威けんいを演じ、勸告を与えるように読んでしまいがちです。しかしそれは、結局はパウロのことばを朗読者のことばにすりかえているだけです。そして、そこに込められたパウロの言霊ことだまが人々の心に入っていく邪魔じゃまをしてしまうことになります。

ではどうすればよいのでしょうか。まずは冷静に読むべきです。変な描写びょうしやをしたり過度に感情を込めた声を使ったり、私

情を込めたりすることは避けるべきです。ただし、冷静に読むということは機械的に読むことと同一ではありません。言葉や内容の喚起するイメージを損わずに伝えることを意識して読みましょう。

昔よく聞かされた言葉で、最近では耳にする機会も少なくなりましたが、教会ではよく「神様の楽器になりなさい」と言われたものです。典礼における歌や聖書朗読で大事なことは、この言葉に端的に表されていると思います。私達も、神様の楽器になろうではありませんか。